

日本婦道記

糸車

山本周五郎

青空文庫

「^{かじか}鰻やあ、鰻を買いなさらんか、鰻やあ」

うしろからそう呼んで来るのを聞いてお高^{たか}はたちどまった。十三四歳の少年が担^びぎ魚籠^{びく}を背負^くつていそぎ足に来る、お高は、

「見せてお呉れ」

とよびとめた。籠の中にはつぶ^{そろ}の揃^{そろ}った五寸あまりあるみごと
な鰻が、まだ水からあげたばかりであろう、ぬれぬれと鱗^{うろこ}を光ら
せてうち重なっている、思^しいだしたようにはげしく口を動かすの
もあり、とつぜんぴしぴしと跳ねあがるのもあって、千曲^{ちくまがわ}川の

みずの匂いが面をうつような感じだった、

「五十ばかり貰いましょう」

そう云つてから容れ物のないことに気がついた、どうしようもあたりを見やると、つい向うに荒物屋の店のあるのをみつけ、このあいだから目筈が一つほしかつたのを思いだした。

「あの店で容れ物を求めますからいつしよに来てお呉れな」

「近くならお宅まで持つてゆきますよ」

少年は賢さかしげな眼でこちらを見た、お高は頬笑みながら、それには及ばない、と云つてあるきだした。

新らしい目筈へ鰯を入れて帰るみちみち、お高はなんと云いようもなく仕合せで心ゆたかに浮き浮きしてくるのを抑えきれなか

った。どうしてこんなに嬉しいのかしら、なぜこんなに心がはずむのかしら、なんどもそう自分に問いかけてみた。会所では褒めて頂いたし、久しぶりで父上のご好物の鰯があつたし、空はこのように春めいて浅みどりに晴れあがっているし、それでこんなにしたのしい気持になるのだろうか。そんな理由を色いろ集めてみたくなるほどだった。そして通りすがりの人の眼にも浮き浮きしてみえるのではないか、そう考えると恥ずかしくて顔が赤くなるようにさえ思った。……父はよだけいしちろう依田啓七郎しなのといつて、信濃のまくに松つしろはん代藩ぶちにつかえる五石二人扶持の軽いさむらいだった、実直いっぽうの、荒いこえもたてない温厚なひとだったが、二年まえに卒中を病んで勤めをひき、今でも殆んど寝たり起きたりの状態がつ

づいている。十歳になる弟の松之助が、名義だけ家督を継いでいたが、まだ元服もしていないのでお扶持は半分ほどしかさがらない、母親は松之助が三つの年に亡くなって、家族は三人だけであるが、病気の父と幼ない弟をかかえての家計はかなり苦しかった。お高はことし十九になるが、父に倒れられて以来その看護や弟のせわや、こまごました家事のいとまを^{ぬす}偷んで、せつせと木綿糸を繰っては生計の足しにしていた。松代藩では種油と綿糸はたいせつな産物だったので、身分の軽い家庭には糸繰りを内職にすすめ、器具を貸したり指導したり、製品を買い上げたりするための会所が設けてある、十日ごとに出来た品を届けるのだが、今日もお高が繰った糸束を持ってゆくと、いつも係になっている白髪のきつ

い眼をした老人が、めがね越しにこちらを見ながら糸の出来を褒めて呉れた。

「僅かなあいだにたいそう上手になられたな、こなたの糸は問屋でも評判になっていそうだ、ひとつには孝行の徳かも知れぬが」
少しでもよい仕事をしようとしてとめている者にとって、その仕事を褒められるほど嬉しいことはない、殊にそれがあたりまえの内職ではなく、藩にとつてたいせつな産物になるのだから、その意味でもお高のよろこびは大きかった。……もつともつとよい糸を繰ろう、そう思いながら帰る途中で鰯が買えた。卒中をわずらつてからいちどやめたが、医者のおすすめで三日にいちど五勺ずつ飲むようになった父の酒には、なにより好物の肴さかなだった。会所で

うけとつて来た手間賃のなかから、焼干しにしてもよいからと思つて少したくさん買ったのである、貧しくつましい暮しをしている者には、小さなよろこびがどんなにも幸福に感じられるのだ、お高はおかしいくらい足も軽く、組長屋の住居に帰つた。

「ただ今もどりました」

とつつきの二帖じょうで、素読をさらつていた弟にそうこえをかけた。あがつたが、松之助は顔を隠すようにしてなんとも答えなかつた。そのときはべつになんの気もつかず、目筈を持ったまま父の居間へいった。

「歸りに鰯を売つておりましたので少し求めてまいりました」
挨拶をするとすぐそう云つて父に見せた、

「ごらん下さいまし、まだこんなに生きております」

「ほうこれは珍らしいみごとなものだな、もうこんなに鰈ふとの肥る季節になったのだな」

啓七郎は少しふるえのある手をさしのべて、目筈の中の魚を好ましそうにつついてみた。

「ずいぶん数があるではないか、まだ高価であろうに」

「いいえそれほどでもございませんでした、今晚のお酒に甘露煮ぎよでんと魚田ぎよでんをお作り申しまして、余ったぶんは焼干しにしてもよいと思いましたがから」

「こんな心配ばかりさせて、どうも……」

「つぶや 呟くようにそう云いかけるのを、お高は聞えぬ風に立ちながら、

「さあ早くおしたく致しましょう」と厨くりやのほうへさがっていった。父の口ぶりや態度がいつもとは違っている、お高はそれを感じずると同時に、弟のようすもふだんとはまるで変っていたことに気づいた。どうしたのだろう、なにか留守に悪いことでもあったのかしら、お高はにわかにな不安になった、そしてそれをうち消したために弟を呼んでみた、

「松之助さん来てごらんさい、みごとな生きた鰯ですよ」
然し松之助の返辞はつきはなすようなものだった、

「いま勉強していますからあとで」

それだけだった。お高はつい今しがたままでの浮き浮きした気持が、かなしいほど重たく沈んでゆくのを感じながら、
庖ほうちょう丁ちやうを

取つて魚を作りはじめた。

二

夕食のあと片づけを済ませてから、お高が糸繰りの仕事をひろげると間もなく父に呼ばれた。

「少し肩を撫なでて貰もらいたいのだが」

父は床の上に取りなおつてこちらへ背を向けていた。脇わきに置いてある行燈の光が、瘦やせた父の高頬をいたいたしくうつしだしていた、お高はすぐその背へつかまつた、

「お寒くはございませんですか」

「まだ酒がきいているとみえてほかほかといひ心もちだ、力をいれなくともよい、そうやって撫でていて呉ればよいから」

「はい、このくらいでございますね」

お高は父の背から肩へかけてしずかに撫ではじめた。松之助は少しまえに寝てしまい、ひっそりと静かになつた組長屋のかなたから、なにか祝い事でもあるのだろう、小謡こうたいのさびたこえが聞えて来た。

「おまえあした、松本へゆくのだがな」

父がふと思ひだしたようにこう云つた、

「松本ではお梶かじどのがご病気だそうで、おまえにひとめ会いたいわから四五日のつもりで来て呉れるようにと、お使いの者が来られ

たのだ」

「父上さま」

お高は思わずそう云った、

「手をやすめては困るな」

父は笑いながら肩を揺りあげた、どうにもかたい笑いだった、「ご病気ということだし、せめて四五日、ながい滞在ではないのだから、こんどはおとなしくいつてくるがいい、留守のことはもう石原のご内儀に頼んであるから」

少しはおまえの骨やすめにもなるであろう、そう云う父の言葉を聞きながら、お高は弟のつきはなすようなさっきの返辞を思いだしていた。やっぱりそういうことがあったのだ、松之助はそれ

を聞いて、幼ない頭でどれほどか悲しがったに違いない、お高は
そう思いやるとするどく胸が痛みだした。

お高には実の親があつた。信濃のくに松本藩に仕えて西村金きんだ

太夫ゆうという、はじめ身分も軽きたいへん困窮していたじぶんに、
妻のお梶とのあいだにつきつきと子が生れ、養育することにもこ
と欠くありさまだったので、しるべのせわで松代藩の依田啓七郎
にお高を遣やつたのである。それからち、金太夫はふしぎなほど
の幸運に恵まれ、しだいに重くもちいられて、数年まえには勘定
方頭取で五百五十石の身分にまで出世をした。このように立身し
て一家が幸福になると、親の情としてよそへ遣つた者がふびん
なるのは当然のことである、それもその子が仕合せであればべつ

だが、人をやって尋ねさせてみると依田啓七郎は妻にさきだたれ、お高を貰ったあとで生れた幼弱な子をかかえて、かなり貧しい暮らしをしているとのことだった。夫妻は幾たびも相談をしたうえ、それまでの養育料を払ってひきとることにきめ、しかるべき人間に立てて依田と交渉した。……そのとき初めてお高は自分の身の上を知ったのである、啓七郎はありのままになにもかも語った、そして「松本の家へ戻るほうがおまえのゆくすえのためだから」そう云って帰ることをすすめた。お高は考えてみようともせず、厭いやだと云いとおした、ついには部屋の隅に隠れて泣きだしたまま、なにを云っても返辞をしなかった。肝心のお高がそんなありさまだったので、間に立った人もどうしようもなく、そのときはな

しは結局まとまらずじまいだったのである。

「お梶どのご病気は、かなり重いようすなのだ」

と、父は暫くして言葉を継いだ、

「ひとめ会いたいという気持もおいたわしいし、おまえも実の子としていちどぐらいはご看病がしたいだろうと思う、意地を張らずにいつて来るがよい、ほんの僅かな日数のことだから」

お高は殆んど聞きとれぬほどのこえで「はい」と答えた。そこまでことをわけて云われるのをむげにもできなかつたし、重い病に臥ふしている生みの母の、ひとめ会いたいという言葉にもつよく心をうたれた。乳ばなれをするとすぐ松代へ貫われて来たそうので、西村の父母の顔はまったく記憶にはない、もしものがあれば、

生みの母の顔も知らずに終らなければならぬ、いちどだけお顔を見せて頂こう、そう考えて承知したのであった。

同じ組長屋でもごく近しくしている石原という家の妻女にあとの事をこまごまと頼んで、その明くる朝はやく、松本から迎えに来たという下婢と老僕にみちびかれながら、あとにもゆくさきにもおちつかぬ気持でお高は松代を立つた。季節はすっかり春めいていた。遠いかなたの山なみにはまだ雪がみえるけれど、うちひらけた丘や野づらはやわらかな土の膚をぬくぬくと日に暖められ、雪解ゆきげの水のとくとくと溢あふれている小川や田ほとりの畔には、もうかすかに草の芽ぶきを感じられた。二十里そこそこの道だったが、ひどくぬかるので馬や駕籠かごに乗りながら三日もかかり、また冬がもと

ったかと思えるほどひどく冷える日の午後、ようやく松本の城下へ着いた。

三

西村の家は和泉いずみというところにあつた。長屋門をめぐらせたかなり広い屋敷で、門をはいると前庭があり、枝ぶりのよい檜むろの木が六七本、高雅な配置で植わっていた。お高は依田の家とあまりに違う家がまえに眼をみはりながら、老僕の案内で脇玄関へまわつた。するとこちらの声を待ちかねていたように、五十あまりとみえる婦人があらわれ、泣くような笑顔で出迎えた。

「まあまあ遠いところをようおいでになった、お疲れだったろうね、今すぐすぎをとりますよ」

心もここにはないというようすで、お高にはものを云う隙も与えず、手をとらぬばかりにして奥へ導いていった。お高は初め茫然としたが、これがお梶という方だと思い、ご病気だというのが拵こしらえごとだということをすぐに悟った。お梶という方、……彼女の頭にうかんだのはそういう呼びかたで、母という表現はどうしても出てこなかった。そして、この拵えごとのなかには単純でないものが隠されていること、然もそれがかなり決定的であるということとは直感しつつ、その婦人のするままになっていた。

どんなたいせつな客でもあるかのように、梶女じよはめしつかい

をせきたててお高に風呂をすすめた、風呂にはいつていと二度も湯かげんをききに來たし、あがると仕立ておろしの高価な衣裝が揃そろえてあつた。

「お好みかわからないものだから年ごろをたよりにわたしを選んだのだけれど」

梶女は着付けをたすけながらそう云つた、

「どうやらあなたには少しじみすぎるようですね、あちらの小紋のほうがよかつたかもしれない、でも今日はこれにしておきましよう」

独り言のようにそんなことを云いながら、撫でまわすような眼でお高の姿をと見こう見して飽きなかつた。お高はやはり黙つて

されるとおりになっていた、問いかけられると「ええ」とか「はい」とか答えるが、自分のほうからはなにも云わず、梶女のどこかしら熱をもったようなまなざしにも、できるだけ気づかぬ風を装っていた。

西村の父や兄弟たちは夕食のときひきあわせられた。父は思いのほか若かった。いちばん上の兄は結婚してもう男の子があり、二兄はまもなく分家するとか、むつつりしている三兄は顔もよく見なかったし、四番めの兄は江戸詰めで留守、弟はまだ前髪たちで名を保之丞やすのじょうといい、背丈のめだつて高いからだつきと、まだ子供こどもした日にやけた赤い頬とに特徴があった。彼はその年ごろの者らしく、ほかの兄たちよりもお高の来ることに興味をも

つていたようで、横からしげしげと眺めたり、必要もないのにしきりと話しかけたりした。席は広間に設けられた、かけつらねた燭台しよくだいはまばゆいほど明るく、大和絵やまとえを描いた屏風びょうぶの丹青たんせいも浮くばかり美しかった。幾つもの火桶ひおけでうっとりするほど暖まった部屋、贅沢ぜいたくといつてもよいくらい品数の多い色とりどりの食膳しよくぜん、そしてなんの苦労もなく憂いも悲しみも知らない親子兄弟の、なごやかに団欒だんらんをたのしむありさま、——これが自分のほんとうの家なのだ、ここにいる人たちが自分の生みの親であり、血肉をわけた兄弟たちだ、いま坐っているこの席は誰のものでもなく正しく自分の席なのだ。お高はそう思いながら、できるだけすなおな気持でその室の空気に順応しようとした。けれども

燭台は明るすぎ、絵屏風はあまりに美しく絢爛けんらんで、いかにもおちつきにくく眩まぶしかった、数かずの料理もいずれは高価な材料と念いりな割烹かつぼうによるものであるが、お高にはなにやらよそよそしくて、美味おいしいという気持はおこらない、そしてその一つ一つが松代の家のことに思い比べられ、しめつけられるように胸が痛んだ。

切り貼ばりをした障子、古びた襖ふすま、茶色になってへりの擦れてい
る畳や、凍しみ割れのある歪ゆがんだ柱、煤すすけた行燈の光にうつしださ
れるあの狭い、貧しい部屋のありさまがまざまざとみえる、乏し
い炭をまるで劬いたわるように使うあの火桶ひとつでは、冷えのきびし
い今宵はどんなにか寒いことだろう、依田の父と松之助は、いま

二人きりであの貧しい部屋のつつましい食膳まに向かっているじぶんだ。菜の皿はひとつ、汁椀の着くことさえ稀まれで、漬物の鉢だけが変らない色どりである。いま眼の前にあるゆたかな膳部からみればかなしいほど貧しいものだ、然しそのひと皿の菜をどんなに心こめて作るだろう、また父や松之助がどんなによろこんで喰たべて呉れることだろう。頼んで来た石原の妻女はよく気のまわる親切なひとだった、父の好物もあらし告げて来たが、今宵はどんなしたくが出来たであろうか、父の氣にいるものだろうか、もしかして酒をあがりすぎはしないかしらん。……お高のあたまはこういう考えでいっぱいだった、なにを喰べたかも覚えず、どういふ会話がとり交わされたかも知らなかった。そして終るとすぐ自

分のために用意されたという部屋へひきこもり、なにか話しかけたような梶女にも「疲れているから」と断わって、まだ宵のうちから夜具のなかにはいつてしまった。

四

明くる朝、起きてきたお高の眼がいたいたしいほど赤く腫はれば、
つたくなっているので、梶女がびっくりして、

「どうおしだ」

と訊ねた。お高はさびしげに頬笑んだ、

「寝つかれたのでございましょう、少しやすみすごしましたから」

「それならいいけれど……」

梶女はたしかめるようにこちらを見ていたが、すぐ思いかえしたようすで、今日は山辺やまべの温泉いでのゆへゆくからしたくするようにと云った。

「ここから一里あまり山のほうへいったところで、湯もきれいだし美しい眺めもあり、疲れたときなどにはよい保養になります」

「有難うございますけれど」

お高は眼を伏せながらそつとこう云った、

「わたくし、今日ではできますことなら御菩提寺おぼだいじへまいりたいと存じます」

「ああそれなら山辺へゆく途中ですよ、少しまわりみちをするだ

けですから参詣さんけいしてまいりましょう」

「いいえ」

お高はかぶりを振った、

「わたくし今日はおまいりだけに致しとうございます、初めてのことでございますから」

初めて祖先の墓へまいるのに遊山を兼ねるのは不作法だと思ふ、そういう意がはつきり表われていた。梶女はさすがにおもはゆそうだった。

「それなら山辺は明日のことにしましょう」

こう云つてその日は墓参ということにきめた。

菩提寺から帰るみちで、お高は自分の生れた家が見たいと云つ

た。梶女はすすまないようすだったが、いっしよにいった弟の保之丞がさきに立って案内した。深志ふかしというところの端に近く、自分の軽いさむらい屋敷がひとかたまりになっている、そのなかでも貧しげな古びた幾棟かのなかに、その家があった。目隠しというばかりの塀へいをとりまわした中にささやかな庭があり、枝ぶりのいじけた勢いのない松が門の脇に立っていた。板葺いたぶきの屋根は朽ち乾いて松毬まつかきのようにはぜ、小さな玄関の柱やはめ板は雨かぜに曝さらされて、洗いだしたように木目が高くあらわれていた。軒は傾ひさしき庇はなみをうっている、まわりにゆとりがあるのと、部屋の数が少し多いかと思えるだけで、そのほかは松代の家とは大差のない住居だった。

「私はこの家に五つまでいたのですよ」

保之丞はそう云つてなんの屈託もなく笑つた。

「あの窓の下の地面に蟻ありじごく地獄がいましたっけ、それを捕つて手のひらを這はわせるんです、するとそいつは手の皮の中へもぐり込もうとする、むずむずして擦くすくつたいんですが、その恰好がおもしろいのでよくやったものです、ご存じですか」

そんなことを興ありげに云つた。お高はふと、この弟もいまの屋敷よりはこの貧しい家のほうに心ひかれていのではないか、そんなことを考えながら間もなく踵くびすをかえした。

翌日は梶女につれられて山辺の温泉へいった。それは城からひがし北に当る山ふところであり、清らかな流れと、谷たに峡の眺め

の美しい場所だった。母娘おやこはいつしよに湯に浸つかつたり、香りたかい草木の芽をあしらった鄙ひなびた午食をたべたりしたのち、まだ珍らしい山独活やまうどをみやげに屋敷へ帰った。三日めは家にいて、兄弟たちと話したり自慢の道具を見たりして暮した。その夜のことである。自分にあてられた部屋で梶女とあいつ対したとき、お高は明日松代へ帰らせて頂くと云い出した。梶女はそう云われるのを予期していたらしい、そつと部屋を出ていったが、すぐに一通の封書を持って戻って来た。

「依田どのからあなたにあてた手紙です、とにかくこれを読んで
ごらんなさい」

こう云つてそれをわたした。うけとつてみると正しく依田の父

から彼女にあてたものだった。——こんど松本へおまえを帰すに
当っては色いろ考えたが、西村からこれまでの養育料としてかな
り多額なだいもつを呉れるはなしがあり、それだけあれば自分は
田地でも買つて、松之助とふたり安穩にくらしてゆけるし、おま
えも西村のむすめとして仕合せな生涯にはいれるであろう、自分
のためにもおまえのためにもこうするのがいちばんよいと思う、
じかにこのゆくたてを話したうえ、こころよく別れを惜しみたか
つたが、顔をみていてはおまえの気持がきまるまいと考え、むじ
ひなようだがいつわりを云つて立たせた、どうかこんどはわがま
まを云わずに承知してもらいたい、西村へいったら両親に孝行を
つくすよう、兄弟と仲よう仕合せなゆくすえを祈っている。そう

いう意味のことが、依田の父らしく篤実な筆つきで書いてあった。

「よくわかったでしょう」

梶女はお高の読み終るのを待ってしみじみとこう云った。

「いまになっておまえをとり戻そうというのは勝手かもしれない、けれど父上やこの母の気持も察してお呉れ、おまえの生れたじぶんは父上のご身分も軽く、子供を多くかかえて、恥ずかしいはなしだけれどその日のものにもさしつかえるようなことさえある、貧しく苦しい暮しでした。人の親として、乳ばなれしたばかりの子をよそへ遣らなければならぬ、それがどんなに辛い悲しいことか、やがておまえが子をもつたらわかつて呉れることでしょう、身を切られるようなと云う、そんな言葉では云いあらわせない、

辛い悲しいおもいでした」

五

「それほどのおもいをして、おまえを遣らなければならなかった、もう耐えきれない、一家が飢え死をしてもいいからとり戻しにゆこう、なんとそう思ったかしれません、暑さ寒さ、朝に晩に泣いてはいはしないか病気ではないかと、心にかからぬときはありませんでしたよ」

梶女は袖口で眼を押えながら暫く声をとぎらせていた、

「父上のご運がひらけて、どうやら不自由のない明け昏くれを迎え

るようになってから、父上とわたしはおまえをひきとる相談ばかりしていました。松代へ人をやってたずねさせると、ながく病んでいる依田どのと幼ない弟のめんどろをみながら、おまえが糸繰りをして家計をたてているという、貧にせまられて遣ったおまえが、いまは自分でその貧とたたかっている、それを思うとわたしたちはとても安閑と暮してはいられなかった、これまでの苦勞を幾らかでも償ってあげなければ生みの親としてどうしても心が濟まないのです、依田どのには決して悪いようにはしません、高さん、こちらへ帰ってお呉れ、この西村のむすめになってお呉れ、
ねえ」

膝ひざの上にそろえた両の手をかたく握りしめながら、お高は硬ば

つた顔をじつと俯向^{うつむ}けていたが、梶女の言葉が終るとしずかに眼をあげて、

「おぼしめしはよくわかりました、ほんとうに有難う存じますけれど、わたくしやはり松代へ歸らせて頂きます」

抑揚のない声でそう云った。梶女の頬のあたりが微^{かす}かにひきつた、

「でも依田どのとはもうはなしがついていのです、どちらのためにもこれがいちばんよいと依田どのも云つておいでなのですよ」
「それをご本心だとおぼしめますか」

お高はそつとかぶりを振り梶女の眼を見あげた、

「依田の父がそう仰^{おつ}しやるのはこちらへの情誼^{じょうぎ}からだとはお考

えになれませぬか、あなたはいま人の親として子をよそへ遣るこ
とがどんなに辛いものかということをお高に仰しやいました、乳ばなれ
をするまでの親子でもそれほどののに、十八年もいっしょに暮し
てきた親子はそうではないとおぼしめしですか」

お高はそう云いながら、松本へゆけと云われた夜のことを思い
うかべた。あのととき依田の父はこちらへ背を向けて、お高に肩を
揉もませながらあの話をしりだした。父はお高の顔を見ることがで
きなかつた、自分の辛い顔もみせなくなかつたのだ、それがいま
お高には痛いほどじかに思い当る、ああ、どんなにお辛い気持ちで
松本へゆけと仰しやつたらう、お高は胸を刺されるように感じな
がらしずかに続けた、

「依田の家は貧しゆうございます、わたくしが糸繰りをしてかつかつの暮しをたてているのもほんとうです、けれどもそれはあなたがお考えなさるほどの苦労ではございません、こう申上げては言葉がすぎるかもしれませんけれど、こんどのことさえなければ、わたくし仕合せ者だとさえ思っております、依田の父はもったいないくらいよい父でございます、弟もしん身によくなついて母のようにたよつていて呉れます、わたくしにはあの家を忘れることはできません、いまになって父や弟と別れることはわたくしにはできません」

「それだけの深いおもいやりを、わたしたちにはしてお呉れでないの」

梶女はすがりつくような口ぶりでこう云った、

「ここをおまえのお部屋にと思つて、襖を張りかえたり、調度を飾ったり、新らしく窓を切ったりした、着物や帯を織らせたり染めさせたりして、こんどこそ親子きようだい揃つて暮せるとたのしみにしていた、これでこそ父上もご出世の甲斐かひがあるとよろこんでいたのですよ、それを考えてお呉れではないのかえ」

それは哀願ともいふべき響きをもつていた。心をひき裂かれるようなおもいで、これが親の愛情だと思いつつお高は聞いた。子のためには、子を愛する情のためにはなにも押し切ろうとする、それが親というものの心であろう、かなしいほどまっすぐな愛、お高はよろよるとなり、母の温かい愛のなかへ崩れかかりそうに

なった。自分のために模様がえをしたというその部屋、新らしい調度や衣装、どの一つにもまことの親の温かい愛情がこもっている。その一つ一つが手をひろげて迎えているのだ。けれども、お高はけんめいに崩れかかる心を支えた、自分はその愛を受けてはならない、依田の家を出てその愛を受けることは人の道にはずれなのだ。こう自分を叱りつけながら、お高はやはり松代へ帰ると繰り返した、

「みなさまのお仕合せなごようすも拝見しました、もう一生おめにかかれなくともこころ残りはございません、どうぞお高はこの世にない者だとおぼしめして、これかぎり忘れて頂きとうござい
ます」

梶女はしずかに立っていった。すぐに弟の保之丞が来、あとから金太夫と長兄とが来た、みんな言葉をつくしてここにとどまるようにとくどいた。お高はもうなにも答えなかった。喪心したように眼をつむり、肩つきの堅い姿勢でしんと坐っていた。それはまさしく問罪のように苦しい瞬間であつた。

六

明くる朝まだほの暗いうちにお高は松本を立つた。来るときの老僕と下婢が供について、梶女と保之丞とが城下から一里あまりの中原という辻^{つじ}まで送つて来た、そしてその掛け茶屋でいっし

よに茶を啜り、暫く別れを惜しんでから袂をわかつた、二人はお高の姿が道を曲つてゆくまで見おくつていたが、お高はいちどもふり返らず、まっすぐに並木の松のかなたへ去つていった。

道をいそいだので松代へは三日めの午まえひるに着いた。城下町が見えだすともう胸がいつぱいになり、いくら拭いてもあとからあとから涙がこみあげてきた、ほんの僅かな留守だったが、山やまの姿も千曲川のながれもなつかしく、眼につくほどの樹立や丘や段畑、路上の石ころまで呼びかけたいような懐かしさが感じられて、郷くにへ帰つたという氣持がした。……松之助は稽古からまだ帰らず、家には啓七郎ひとり、ちようと薬湯を煎せんじていたところだった、老僕のおとずれる声を聞いて玄関へ出て来たが、はいつて

来るお高を見るとあつという表情をした。

「ただいま戻りました」

お高は簡単にそう挨拶をすると、すぐ裏へまわって自分のすずぎをし、供の二人にもあがつてひと晩泊ってゆくようにと云った。然しかれらは玄関で西村からの口上を述べ、手みやげなどを置いてあがらずにたち去った。

「どういふわけで帰った」

さし向いになつて坐ると、啓七郎は煎じていた薬湯を湯のみにつぎながらそう云った、

「持たせてやった手紙は読まなかつたのか」

「拝見いたしました」

「それなら事情はわかっているはずだ、おれも安穩な余生がおくれるし、おまえの一生も仕合せになる、そう考えたことなのに、眼さきの情に溺れてなにもかもうち毀^{こわ}してしまうつもりか」

「おゆるし下さいまし、父上さま」

お高はひしと父を見あげ、そこへ手をついた、

「わたくしもつと働きます、お薬にもご不自由はかけません、お好きなものはどんなにしても調えます、もつとお身まわりもきれいにして、お住みごこちのよいように致します、ですからどうぞお高をこの家に置いて下さいまし」

「おまえにはおれの気持がわからないのか、おれがそんなことを不足に思っているようにみえるか、おれがおまえを西村へかえす

決心をしたのは」

「わかつております、わたくしにはわかつておりますの、父上さま」

お高は父にそのあとを続けさせまいとしてさえぎった、

「わかつておりますけれど、お高はいちどよそへ遣られた子でございます、乳ばなれをしたばかりで、母のふところからよそへ遣られたお高を、父上さまは可哀かわいそうだと思つては下さいませんか、もし可哀そうだと思ひ下さいましたら、ここでまたよそへ遣るようなことはなさらないで下さいまし」

「だが西村はおまえにとって実の親だ、西村へもどればおまえは仕合せになれるのだ」

「いいえ仕合せとは親と子がそろって、たとえ貧しくて一碗の粥かゆを啜りあつても、親と子がそろって暮してゆく、それがなによりの仕合せだと思ひます、お高にはあなたが眞実のたつたひとりの父上です、亡くなつた母上がお高にとってほんとうの母上です、この家のほかにわたくしには家はございません、どうぞお高をおそばに置いて下さいまし、よそへはお遣りにならないで下さいまし、父上さま、このとおりにおねがい申します」

「父上」

と、叫びながら松之助が走せはいって来た。稽古から帰つて、表で二人のはなすのを聞いていたのだろう、眼にいっぱい涙を溜ためながらはいつて来ると、姉とならんでそこへ坐り、なかば噎むせびあ

げながらこう云った、

「どうぞ姉上を家に置いてあげて下さい、父上、こんなに仰しや
つているのですもの、どうかよそへは遣らないで下さい、おねが
いです」

啓七郎は眼をつむり、蒼あおざめた面を伏せ、両手を膝あしに置いてじ
つと黙っていた。それは大きなするどい苦痛に耐える人のような
姿勢だった。そしてながいこと、お高と松之助との噓うそびあげるこ
えだけが、貧しい部屋の壁や襖ふすまへしみいるように聞えていた。

「……では家にいるがよい」

啓七郎がやがて呻うめくようなこえでそう云った、

「西村どのへは父から手紙を書く、もう松本へは遣らぬから」

松之助は姉の膝へとびつき、涙に濡れた頬をすりつけながら声をあげて泣きだすのだった。

爽やかな朝の日光が、明り障子いっぱいにさしつけている、いかにも春らしく、心を温められるような明るさだ。お高の繰る糸車の音が、ぶんぶんと、そのうらかな朝の空気をふるわせて聞えてくる、蜂のはち翅音はおとにも似たしずかな、心のおちつく柔らかい音である。啓七郎はそれを聞きながら、

「おまえ成人したら姉上をずいぶん仕合せにしてあげなければいけないぞ」

と、松之助に云うのだった。

「大きくなればわかるだろうが、姉上はこの父やおまえのために

せつかく仕合せになれる運を捨てて呉れたのだ、自分のためではない、父とおまえのためにだ、……忘れては済まないぞ」

松之助は父の眼を見あげて、少年らしくはつきりと頷うなずいた。糸車の音はぶんぶんと、歌うようにしづかな呻うなりをつづけていた。

青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第二巻 日本婦道記・柳橋物語」新潮社

1981（昭和56）年9月15日発行

1981（昭和56）年10月25日2刷

初出：「婦人倶楽部」大日本雄辯會講談社

1944（昭和19）年2月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井和郎

2019年2月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日本婦道記

糸車

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 山本周五郎

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>